

2026年2月8日 信教の自由を守る日礼拝メッセージ
「やってみようと、どうせダメだ」

牛田匡牧師

聖書 マルコによる福音書 2章 1-12節

今回のお話は、聖書協会共同訳では「体の麻痺した人を癒やす」という小見出しが付けられたお話でした。以前の翻訳では脳梗塞などによる麻痺を表わす「中風の人をいやす」と訳されていましたが、体の麻痺は脳梗塞などによるだけではありませんので、このように訳し直されました。場所はカファルナウムです。カファルナウムは、ガリラヤ湖の北西の湖畔にある港町で、イエス様がその活動を開始された直後に、シモン・ペトロとその兄弟アンデレや、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネら、4人の漁師たちを弟子にした町でした（マルコ 1:16-20）。そこには会堂もあり、収税所もあり、ローマ軍も常駐していて百人隊長がいたというので、小さな村というわけではなく、人口はおよそ1000人～1500人ほどであったのではないかと考えられています（山口里子『マルコ福音書をジックリと読む』36頁）。またそこにはシモンとアンデレの家もあり、そこで熱を出して寝ていたシモンの義理の母が、イエス様に手当をしてもらったというお話もありました（マルコ 1:29-32）。

そのようなわけでしたから、イエス様たちはこのカファルナウムを本拠地として、ガリラヤ地方のあちこちを歩き回っては、時々この町に戻って来していました。ですから、今回のこのお話の舞台は、まさにシモンとアンデレの家であったのかもしれません。「イエス様が家におられる」ということが周りに知れ渡り、イエス様の話を聞こうとして、大勢の人が集まってきました。あまりにも大勢の人が集まって来たので、家の中はギュウギュウ詰めで、「戸口のあたりまで全く隙間もないほどになった」そうですから、たとえるなら、まるで通勤ラッシュの時間帯の満員電車のような状態になっていたということでしょう。

そこに4人の男性が、体の麻痺した一人の男性を連れてやってきました。「愈し人」として評判になっていたイエス様のことを耳にして、何としてもイエス様に癒してもらいたいという一心で、4人でその人を連れて來たというわけです。しかし、家の中には人が多過ぎてイエス様の近くまで行くことが出来ません。このような時、私たちならどうするでしょうか。例えば、お店に行列ができていたら、列に並んで自分の順番が巡って来るのを待つのではないかと思いますし、場合によっては

「また後程」、もしくは「日を改めて出直します」ということもあるかもしれません。しかし、彼らは違いました。このままで^{らち}は埒が明かない、日が暮れてしまう。「自分たちは遠くの町からはるばるやって來たから、今日しかチャンスはない」。そのような切実な思いがあったのかもしれません。

ともかく、彼らは多くの人が予想もしなかった行動に出ました。即ち、家の外から屋根に上り、屋根を葺いていた葉や木材を動かして、人が入れるサイズの穴を開け、そこから体の麻痺した人を担架ごと、イエス様の前に吊り下ろしたというわけです。家の中にいた人々は突然頭の上でバリバリと音がして、天井が剥^はがされたと思ったら、そこから担架が吊り下ろされてきたのですから、とても驚いたでしょう。そしてイエス様は屋根の上から担架を吊り下ろしている4人の姿を見て、何としてもこの体の麻痺した友人を、イエス様に見てもらいたいという必死な思いを、ひしひしと感じられたのだと思います。

イエス様は目の前に吊り下ろされた人に対して、「子よ、あなたの罪は赦された」と言われました。しかし、その場に居合わせた律法学者たちは、その発言を聞いて「神を冒瀆^{ぼうとく}している」と捉えて、慌てました。イエス様はそれを「靈で見抜いて」ありますが、律法学者たちがザワザワしたり、ソワソワしたりしていたのを見たのかもしれません。当時、罪の赦しは、律法に定められている通り、神殿に行って定められた手続き通りに「贖罪^{しょくざい}の献げ物（償いのいけにえ）」を献げる必要がありました。そしてそこには当然、お金も時間も必要でしたし、神殿の祭司たちや、律法学者たちはそのような制度を守ることを大切にしていましたから、いきなり単なる家の中で「あなたの罪は赦される」などと言われたら、たまたものではなかったわけです。

この後、福音書では、「この人に『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて、床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう」(9-10)とイエス様が言われたと記されていますが、要するに、神殿の祭司たちや律法学者たちは、旧来からのしきたり、律法の通りに神殿で献げ物がなされたら、それに応えて「あなたの罪はこれで赦された」と告げているが、それでこの人は歩けるようになつていなかではないか。この人を歩けない状態、麻痺の状態にしているのは、むしろ「あなたが歩けないのは、過去に犯した罪のせいだ」と断罪しているからではないか。だからこそ、そんな言葉に耳を傾ける必要はない。「私はあなたを罪に定めない。あなたは自分で起きて、自

分の足で歩くことができる」……。そのように告げたのだろうと理解することができます。

そもそも、福音書の中で、イエス様は「罪」の話はほとんどしていません。病気や障がいが「罪のせいだ」と考えられていたと記されているのも、このお話と、目の見えない人の癒しのお話(ヨハネ9章)くらいです。昔も今も、人が生活していれば当然、ケガもするし、風邪もひいたでしょう。シモンの義理の母が熱を出していたというのもそうです。それらの全て、一つ一つが何らかの「罪のせいだ」とか「何かの罰が当たった」というのではなく、むしろなかなか治らない重い病気などの時に、「どうして治らないのか」と思い悩む中で、そのような理解が出てきたのだろうと思います。またそのような時に、周りから「あれは罪のせいだ」とか「悪霊に取り憑かれているせいだ」と後ろ指をさされたら、それこそもっともっと息苦しくなり、居場所もなくなり、さらに病気になってしまうというのも、想像にたやすいことではないでしょうか。

罪の「赦し」と言われている言葉(アフィエーミ)の元々の意味は、「そのまま行かせる」です。「周りの人たちの陰口なんか、気にしなくても大丈夫。あなたは今までそのまま進んでいくことができる」。イエス様は、そのように励まし、引き起こし、背中を押された。それによって、癒された、解放された人々が多くいたのだろうと思います。この体の麻痺した人の癒しのお話でも、4人の友人たちが、満員電車状態の家の前で中に入れず、諦めていたら、それで終わりでした。「どうせダメだ」ではなく、何とかして「やってみよう」と思って試行錯誤したからこそ、その人は癒され、新しい生き方へと歩みを進めていくことができるようになりました。仲間たちと共に諦めないで「やってみよう」と取り組み続けること。そこに紛れもなく共にいてくださる神の助けがあるのではないかと思います。

今日は、寒波が到来して、全国各地で雪の降る中の衆議院議員選挙の投票日となりました。突然の解散から公示、投票までの期間がとても短かったこともありますし、雪の季節ということもあり、選挙活動はあまり行われていなかったようです。この大阪でも都心部を除いては、街宣も行われておらず、選挙ポスターの貼られた掲示板がある位で、いわゆる選挙カーが走っているのにも出会わないほどでした。今回の選挙活動は各党、それほど実感の伴わないものでしたが、その一方では、自民党がテレビCMやインターネットCMに登場し続けていました。恐らく巨額の広告費がつぎ込まれたと考えられますぐ、地に足がついていないインターネット

上のバーチャル空間で、圧倒的な人気を得ているのには、ある種の不気味さや恐ろしさを感じました。

「失われた 30 年」を経て、高市政権になってから、外交も不安定になり、円安は加速したために物価は上がり、生活はますます厳しくなっています。この生活が厳しくなったのは、誰かのせい。それこそ「外国人のせいだ」と言って排斥する差別、人権侵害政党もあります。「戦争をしないためには軍拡が必要だ」などというおかしな論理を主張する首相が受け入れられ、人気を博している背景には、「もう戦争にでもなって、この社会がどうにでもなれ」とでも言うような、社会そのものに対する諦めや、投げやりな思いがあるように思えてなりません。

今からもう約 20 年前になりますが、「丸山眞男をひっぱたきたい 31 歳フリーター。希望は、戦争。」(赤木智弘『論座』2007 年 1 月号 朝日新聞社)という論考が発表された時、就職氷河期真っただ中で、社会に希望を持てず、暗澹たる思いを内に秘めた人たちが増えていることを実感しましたが、それからの 20 年間で社会の格差はますます開き、社会に対する恨みやつらみを抱く人々は増え、単に思いを秘めているだけではなく、実際に差別や暴力として、それらが露見するようになりました。さらにインターネットの YouTube などのソーシャルメディアで、「とにかく多くの人に見てもらって数多く再生されたら、収入が入って来る」という構造と相まって、演説全体の中から極一部を切り取ったショート動画が、膨大に出回るようになり、それらが差別や暴力を助長しています。

今回の選挙は、高市首相の独断で「彼女を総理大臣として認めるか認めないか」が争点だとされていますが、本当の争点は「戦争をする国になるか、しない国でいるか」ということだと思います。社会への不満や諦め、怒りから、ファシズムが生まれ、100 年前の世界大戦が始まられたように、今この社会にある人々の不満や怒りが、暴走していこうとするのを、「もう駄目だ」と諦めてしまっては、それこそ取り返しがつかなくなってしまいます。この社会の現状を、誰かのせいだと決めて、排斥するような短絡的な思考や、「この私に任せたら、強い国にするから大丈夫。すべて私に任せない」というようなファシズムの思考から、解放される必要があります。私たちはそのような命を損なう道を踏み外した歩み(罪)から解放されることができる。命を生かす神様と共にあって、私たちは諦めることなく命を守る道へと歩みを導かれて参ります。